

【どちゃく】

とにかくいつも腹がへっています。

一日一食の日も、何も食わない日もあります。

食える日も栄養のあるものは滅多に食えない。

例えば肉なんか食ったことがない。

現代ならそれは別段体調管理として悪くはないが、育ち盛りの栄養失調は、いろんな障害を生みます。

例えば、指は曲がっているし、歯はすぐに欠けるし、夕方はほとんど目が見えない。

しかし、そういうことはぼくだけではなくて、村のこどもたちの半数はそうなので、文句もないのです。

腹が減ったら、待っていないで、自分で食べ物を探す習性も、ついています。

なかなか見つからないときは、土を食います。

「土のなかには毒もあるけど栄養もある」

とおとなたちに教えられていました。

「それに土を食うたら土着になれるでな」

土着というのは、まあ村に対する愛着、というくらいの意味でしょうが、そんなことをよく云われたものです。

もちろん、土のなかにも、旨い土と不味い土とがあります。

旨い不味いは正確でないから、食べやすい食べにくいと云ったほうがいいでしょう。

砂や小石が多く混じった土や、粘土質の土や、固い赤土や、虫や蚯蚓（みみず）が居る土は、食べにくい。

食べやすいのは、すこしだけ湿った黒い土で、きめが細かく、黒ければ黒いほどいい。

そういう土は、いくら食べても胃が痛まないし、下痢をしにくい。

真っ黒いうんこがでるのは厭だけれども、そんなこと、慣れれば問題はない。

ところが、そのうち、その真っ黒いうんこが、うんこではなく、土がでてくる。

「そうなったらしめたもんじゃ」

とおとなたちは云います。

「土着が定着したってことじゃから」

なるほどとぼくは感心します。

「そうなったらもうけもんじゃ」

とおとなたちは云います。

「そのうんこを食べばいいわけだから、わざわざ黒土のうんこを探さなくていい」というわけです。

なるほどとぼくは実行します。

こうして腹すかしのぼくは、生き抜いてきました。

そうしてぼくは、土とうんこの解説ならいくらでもできますが、このくらいにします。